



宗像と石炭と貝島太助

『新修宗像市史』近代部会から

宗像にも炭鉱があった

宗像にも炭鉱があつて石炭を掘つていた——このことを知る人も少なくなつていますが、確かな証拠に昔の人の回想を聞いてみましょう。

大正6年(1917)の夏、一人の若者が信玄袋(手荷物袋)を肩に国鉄(現JR)赤間駅に降り立った。……駅前にあたむろする二、三台の人力車……大枚五十銭を奮発して車上の人となる。しばらく続いたたんぼ道もやがて山道にかわる。「ここが山田の地蔵峠で……」これが玄界灘ですたい」と(車夫は)一段と声を高める。だから坂を下り、やや小高い丘に来ると、立ち働く人々の気配が伝わってくる。ここが我が新たな任地、宗像郡池野村池田炭坑であつた(『貝島会会報』昭和51年11月)。

貝島太助と宗像の関わり

若者が新興の炭鉱に誇りと希望を抱いて着任する情景が目に見えぶようです。池野村池田(現・宗像市池田)には明治中頃に創業した炭鉱がありました。不況のため数年で会社が解散になり廃坑状態になっていました。この炭鉱の復興に尽力したのが貝島太助です。太助は、江戸時代末期の弘化2年(1845)に鞍手郡直方村で生まれ、早くも9歳の頃には坑内で働いていたといわれています。炭鉱経営で成功し、明治18年(1885)には鞍手郡宮田村、今の宮若市に大之浦炭坑を開発して会社を発展させる一方、私財を投じて小学校を幾つも創設しています。太助は各地の炭鉱に一族を配して地方財閥化し、安川敬一郎一族、麻生太吉一族と並んで「筑豊御三家」と呼ばれました。

貝島太助の池田との縁は明治初頭に遡ります。当時、筑豊の長老渡

辺弥右衛門は池田村に招かれ、石炭の探鉱や採掘を指導していましたが、その渡辺に目を掛けられ助手役を務めたのが、当時未だ修業中だった太助でした。若くして骨身を削った池田の炭鉱には特別の思い入れを持ったことでしょう。



直方市・多賀町公園の貝島太助翁像

貝島池田炭鉱の設立

筑豊有数の企業家となった太助が、初めて池田の鉱区を買収したのは明治29年頃のことです。大正5年(1916)11月には池野村に貝島炭業池田炭業所が開設されましたが、社長の太助は残念にもその直前に病で亡くなっています。72歳でした。創業者の死を乗り越えて、坑長や若い社員の奮闘で作業は順調に進み、大正6年1月から地下の開坑作業に着手し、年末になって炭層に到着し、翌年正月から営業出炭が始まりました。

掘った石炭は荷馬車で赤間駅まで運んでいましたが、第一次世界大戦による好景気で出炭量が増加し、運送コストが上昇してきたので、20万円を費やして石炭運搬用の空中索道(ロープウェイ)を赤間まで建設しています。

池田炭鉱は堅坑だけでなく斜坑も有する近代炭鉱で、年間2万トン以上の良質石炭を産出しましたが大正9年5月、同業者の要請に応じて他社に譲渡されました。会社は戦前から戦後にかけて中小炭鉱としてコンスタントに石炭を産出し続けてきましたが、全国的なエネルギー革命のあおりを受けて昭和33年(1958)12月に閉山しました。玄海ニュータウン一帯はその跡地です。

(近代部会 砂場一明)



石炭運搬用空中索道(昭和御大典記念史跡名勝写真帖、昭和3年)